

保健体育科教員養成課程における  
学生の「ゲームを見る観点」の変容に関する研究：  
ハンドボールの授業を事例に

永野翔大<sup>1,2)</sup>，田代智紀<sup>3)</sup>

**A study on modification of “viewpoint of a Game”  
of University Students in a Teacher Training Course  
in Health and Physical Education:  
A Case Study with a Handball Lesson**

Shota NAGANO<sup>1,2)</sup>, Tomoki TASHIRO<sup>3)</sup>

Abstract

In this study, we provided university students with a practical lesson in a sport in which they did not specialize. Our aim was to see how the student's “viewpoint of a game” in that sport changed and to determine what those changes were. To achieve this objective, we asked students taking a handball lesson to write up their impressions of games, and targeted these written impressions for analysis with text mining. We made the three findings stated below.

1. The way students “viewpoint of a game” changed. Initially, they viewed a game based on comparisons with other ball sports and as an exercise in maneuvering to shoot. This attitude progressed to probing the intention of the plays culminating in shooting and considering the team's offensive strategy. Beyond that, they came to consider fast breaks and defense in the face of fast breaks, group tactics, and the team's defensive strategy.

---

1) 桜美林大学健康福祉学群健康科学専修

College of Health & Welfare, J. F. Oberlin University

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程コーチング学専攻

Graduate School of Comprehensive Human Sciences Doctoral Program in Coaching Science,  
University of Tsukuba

3) 九州共立大学スポーツ学部

Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science

2. The students became able to “viewpoint of a game” involving aspects covered mainly in their lesson.
3. Our results suggested that the potential to “viewpoint of a game” can be cultivated based on just existing experience of exercise and theoretical guidance, for aspects not covered in practical training.

Key words: text mining analysis, coaching ability, non-specialist sport

## I. 緒言

### 1. 保健体育科教員に求められる専門的な指導力

保健体育科教員（以下、体育教師と略す）には、中学校と高校の体育分野では「体づくり運動」「器械運動」「陸上競技」「水泳」「球技」「武道」「ダンス」「体育理論」に関する専門的な指導力が求められる（文部科学省，2009；2017）。そのため、体育教師を目指す学生は、それぞれの大学における教員養成課程の中で体育分野に関連する各専門科目を履修し、その専門的な指導力を身につける必要がある。しかし、それぞれの教員養成に関する科目の授業の中では、生徒に対する学習活動へのマネジメント能力の養成が中心となっており、コツやカンへの指導、すなわち種目に専門的な指導力の養成は図られないのが一般である（金子，2005，p. 53）。自身が専門とする／してきた種目であれば、その種目特性を理解していることや、自身の競技経験からある程度の指導をすることは可能である（金子，2005，p. 54）。しかし、専門外の種目の指導力を身につけるためには、種目に対する知識やプレーの経験不足から、その習得に困難が生じることは言うまでもない。そのため、専門外の種目を指導する場合、体育教師は生徒の動きから「何が重要なポイントなのか」を見抜くことができないことがあると言える。

### 2. 「ゲームを見る観点」を養成する必要性

体育教師が生徒の動きの「見抜き」を行うた

めには、前提としてその種目のゲームの特性を見抜く必要がある（土屋，2007）。なぜなら、ゲームを見てそこから重要なポイントを見抜くことができなければ、生徒一人ひとりの目指すべきパフォーマンス像が曖昧となり、中途半端な指導になってしまう可能性があるからである。

ゲームの重要なポイント、すなわち「ゲームを見る観点」を身につけるためにはその種目の「運動知識」と「運動経験」が必要となる（佐野，1990）。そのため、教員養成課程の各専門科目を担当する大学教員は、学生に対して「運動知識」と「運動経験」を習得させながら、それらを基にして、ゲームを観察できる能力を養成する必要があるといえる。

### 3. 保健体育科教員養成に関連した先行研究

これまで、保健体育科教員養成に関連した研究は、模擬授業を対象とした研究として、その効果を明らかにした研究（藤田・細越，2009；深見，2005；長谷川，2003；岸本，1995）、教員による省察の重要性を明らかにした研究（木原ほか，2007；藤田ほか，2011）、学生による授業評価の観点の変容を明らかにした研究（木原ほか，2008）や、教員養成過程の各専門科目における授業の運用方法を事例的に紹介した研究（黒須・木村，2016）が行われている。しかし、体育教師として身につけていなければならない種目ごとの専門的な指導力に着目した研究は行われていない。そのため、専門的な指導力を身につけるための前提である「ゲームを見る観点」が、授業を通してどのように変化していったの

かを明らかにすることができれば、保健体育科教員養成課程における専門外の種目の指導力を向上させるための一助になると考えられる。

#### 4. 目的

本研究では、大学生が自身の専門種目ではない実技系の授業を受講することによって、その種目の「ゲームを見る観点」がどのように変化していったのか、その変容を明らかにすることを目的とする。本研究の目的を達成することによって、保健体育科教員養成課程における実技系の授業を充実させるための有用な知見が得られると考えられる。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象

#### (1) 対象とした授業内容

対象とした授業は、X大学のスポーツ健康・科学部を対象に、2年生の前期に開講されている「ハンドボールA」、2年生の後期に開講されている「ハンドボールB」、3年生の前期に開講されている「コーチング・ハンドボールA」、3年生の後期に開講されている「コーチング・ハンドボールB」の4つとした。これらの授業はX大学スポーツ健康・科学部のカリキュラムにおいて、中学校及び高校の保健体育科教

員免許取得のための選択必修科目であった。すべての授業の講師は筆頭研究者が務めた。

表1にそれぞれの授業の概要を示した。X大学の授業時間は1コマ90分であり、基本的にその時間配分は、出欠確認とウォーミングアップを約10分間、メインの内容を約40分間、ゲームを約30分間、クールダウンと次回の内容伝達を約10分間であった。

ハンドボールAとハンドボールBはハンドボールの「行為者」として、コーチング・ハンドボールAとコーチング・ハンドボールBは「指導者」としての習熟をそれぞれ目指した。以下では、それぞれの授業内容ごとの詳細を示す。

#### ①ハンドボールAの内容

ハンドボールAは、主にパスやキャッチなどのゲームに必要な基礎的な技術の習得と、シュートを中心としたオフェンスにおける個人戦術力の向上を目指した。特に、シュートに関してはオフェンスポジションごとの指導を中心に行った。また、1対1状況を突破できるフェイント動作に関する指導を行った。ディフェンスに関しては、ドリブルカットの方法や身体に対して許されているディフェンス方法の指導のみを行った。

#### ②ハンドボールBの内容

ハンドボールBは、オフェンスでは、ハン

表1 授業内容

回	ハンドボールA	ハンドボールB	コーチング・ハンドボールA	コーチング・ハンドボールB
1	オリエンテーション、ゲーム視聴	オリエンテーション、ゲーム視聴	オリエンテーション、歴史	オリエンテーション、ゲーム視聴
2	パス、キャッチ	基本動作の復習	行為者と指導者の観点の違い	オフェンスのグループ戦術（横の2対2）
3	シュート	速攻での2対1	ゲームの局面構造、技術と戦術	オフェンスのグループ戦術（横の2対2）
4	ドリブル、ドリブルカット	速攻での2対2	オフェンスの個人戦術	オフェンスのグループ戦術（縦の2対2）
5	ウイングシュート	様々なパス、スカイプレー	オフェンスの個人戦術	オフェンスのグループ戦術（縦の2対2）
6	ロングシュート	3対2	ディフェンスの個人戦術	指導案作成（グループ戦術）
7	ピヴォットシュート	3対3	ディフェンスの個人戦術	指導案作成（グループ戦術）
8	1対1のオフェンス	グループワーク（講義形式）	指導案作成（個人戦術）	指導実践
9	1対1のディフェンス	マンツーマンディフェンス	指導実践	指導実践
10	広い空間での2対1	6-0ディフェンス	指導実践	指導実践
11	広い空間での2対2	実技テスト	指導実践	指導実践
12	実技テスト	ゲーム	指導実践	指導実践（予定）
13	ゲーム	ゲーム	指導実践	指導実践（予定）
14	ゲーム、撮影	ゲーム、撮影	指導実践	指導実践（予定）
15	自分たちのゲームの評価、筆記テスト	自分たちのゲームの評価、筆記テスト	指導実践	授業の振り返り（予定）

注）コーチング・ハンドボールBの12回目以降の授業は、論文投稿時点（2017年11月22日）において実施前だった。

ドボールAで習得したフェイント動作を用いて3対2や3対3を解決できる力の習得を、ディフェンスでは、マンツーマンディフェンスやゾーンディフェンスの基礎の習得を目指した。また、ゲームの前後にはチームごとのオフenseとディフェンスにおける目標設定とその反省をさせた。

### ③コーチング・ハンドボールAの内容

コーチング・ハンドボールAは、まず、「行為者」と「指導者」の視点の相違点、ゲームの局面構造、技術と戦術（個人戦術、グループ戦術、チーム戦術）などについての理論的な指導を行った。次に、主に1対1状況におけるオフenseとディフェンスの個人戦術について、実技形式での詳細な指導を行った。さらに、2人1組のペアを組ませ、個人戦術の指導をテーマとした指導案を作成させた。その際、指導対象、目的、指導のポイント、指導内容などを明確にするように指導した。指導案を作成後、学生を指導者役と行為者役に分け、ペアごとに指導実践を行わせた。指導後には、それぞれの指導者に対するフィードバックを行為者に行わせた。

### ④コーチング・ハンドボールBの内容

コーチング・ハンドボールBは、まずオフenseにおけるグループ戦術である2対2状況の解決方法に関する指導を行った。具体的には、2人のディフェンスに対して、バックコートプレイヤー2人で攻撃を組み立てる横の2対2と、バックコートプレイヤー1人とピヴォットプレイヤー1人で攻撃を組み立てる縦の2対2を指導した。その後、コーチング・ハンドボールAと同様に、ペアごとにグループ戦術の指導を

テーマとした指導案の作成、指導実践、そのフィードバックをそれぞれ行わせた。

### (2) 対象者

対象者は、2～3年生の間に4つの授業をすべて受講した学生11名とした。なお、対象者の専門種目は、バスケットボール6名、野球1名、バドミントン1名、レスリング1名、空手1名、ダンス1名であり、ハンドボール経験者はいなかった。

## 2. 調査方法

ハンドボールA、ハンドボールB、コーチング・ハンドボールBの1回目の授業において、「ゲームがどのように見えるのか自由に記述すること」と指示を出した上でハンドボールのゲームを見せ、その感想を自由記述形式で記述させた。学生には研究の趣旨説明とともに協力を依頼し、自由意志のもとに研究の同意を得た。表2に授業実施日と視聴対象としたゲームを授業ごとに示した。

## 3. 分析方法

### (1) 分析手順の概略

本研究では、前述した目的を達成するために、永野ほか（2017）の方法を参考に以下の手順を採用した。まず、それぞれの学生が記述した感想文をテキストデータ化し、授業ごとにひとまとめにしたテキストを作成した。次に、テキストを対象にテキストマイニング分析を行い、感想文中でのキーワードの抽出をそれぞれの授業ごとに行った。さらに、キーワードが感想文中でどのように使われているのかを明らか

表2 授業実施日と対象ゲーム

授業名	授業日	対象ゲーム	
		大会名	チーム名
ハンドボールA	2016年4月12日	第17回男子アジア選手権 グループA	日本 vs 韓国
ハンドボールB	2016年9月20日	リオデジャネイロ・オリンピックハンドボール競技 男子決勝	デンマーク vs フランス
コーチング・ハンドボールB	2017年9月19日	第68回全日本高等学校ハンドボール選手権大会 男子決勝	氷見高校 vs 法政大学第二高校

にするために、キーワードを含む文章を文脈が理解できるように感想文から引用し、授業ごとに「ゲームを見る観点」について考察した。最後に、「ゲームを見る観点」がどのように変化していったのかについてまとめ、保健体育科教員養成課程におけるハンドボールの授業への有用な知見を得た。以下では、テキストマイニング分析とキーワードの抽出方法、考察の観点と方法についてより詳しく説明する。

## (2) テキストマイニング分析

テキストマイニング分析とは、大量のテキストデータを対象に、それらの間に潜在する関連性を分析し、隠れた意味のある類似性を発見し類型化する方法であり（大隈・保田，2004），分析の対象となる元データを読んだだけでは解釈しきれない新たな知識の発見を目指している（永野ほか，2017，p. 111）。本研究では、テキストマイニング分析のソフトウェアとしてKH Coder2（Ver.2.00f）を用いた。また、KH Coder2における共起分析のオプション設定を語の描写数30語に設定し、語と語の共起関係はJaccard係数を用いて算出した。

## (3) キーワードの抽出方法

まず、語と語の共起関係を明らかにするために、語の重要度を示す次数中心性をもとに共起分析を行い、共起ネットワーク図を作成した。共起ネットワーク図では、語と語の共起関係を直線で表し、共起関係の強さを直線の太さで示した。多くの語と直線で結ばれているほど次数中心性が高い語と捉えた。次に、サブグラフ検出媒介中心性をもとに実線でつながっている複数の語を比較的強く結びついている語群、すなわちサブグラフとして示した。そして、次数中心性において最も共起関係が多い語が形成しているサブグラフのすべての語をキーワードとして抽出した。

## (4) 考察の観点と方法

大西（1997）は、ハンドボールにおけるゲームの局面をセットオフェンス、セットディフェンス、速攻、速攻に対するディフェンスの4つ

に、ゲームの構成要素をチーム戦術、グループ戦術、個人戦術、技術、体力の5つに分類している。これらの分類はハンドボールの「ゲームを見る観点」としての普遍的な要素と考えられ、本研究を遂行するにあたって有用な観点となりうる。また、筆頭研究者は本事例の当事者でもあるため、実際に行った指導内容との対応からも検討することによって、保健体育科教員養成課程におけるより良い実践につながる限定的な一般性（山竹，2015）を備えた知見を生み出せると考えられる。従って本研究では、大西によるゲームの分類と筆頭研究者による事例的な視点を考察の観点とし、これらの観点をもとに学生の「ゲームを見る観点」の変容について考察した。

「ゲームを見る観点」の変容には、授業内容や対象者の既習概念などの多くの要因が影響を及ぼしていると考えられる。しかし、人間を対象とした応用的研究では、これらの要因を明確にするために環境条件設定を厳密にしようとする、「現場で使えない研究」（坂入，2011）になってしまう。そのため、応用的研究では、対象の特徴に応じて研究の環境条件設定を適切に調整する必要がある（坂入，2011）。このことから、本研究では「対象者による既習概念は変化しない」という定義のもと考察を行った。

まず、筆頭研究者が考察を行った。次に、考察の客観性を高めるために、筆頭研究者と共同研究者の2人でトライアングレーション（フリック，2011）を行った。なお、執筆者はスポーツ系学部に所属するハンドボール専門の大学教員だった。

# Ⅲ. 結果と考察

## 1. ゲーム視聴における観点の特徴

### (1) 1回目のゲーム視聴における観点の特徴

1回目のゲーム視聴では、最も多くの語と共起関係にある語は「似る」「ない」の2語だった。「似る」とともにサブグラフを形成している「バスケットボール」「感じる」「打つ」「あ

る」の5語と、「ない」とともにサブグラフを形成している「できる」「なる」「わかる」「止める」「すごい」「ゴールキーパー」の7語の合計12語がキーワードとして抽出された(図1)。これらの語が用いられている引用文には、「バスケットボールよりも相手との接触が多いように見えた」「ゴールキーパーとプレーヤーのフェイントの掛け合いが多い」などがあった(表3)。

#### ①他球技との比較の観点

ハンドボールのセットオフenseは組み立て、きっかけ、展開、突破、シュートの5つの局面で構成される(大西, 1997, p. 102)。引用文からオフense面では、「シュートまでの動きはバスケットボールみたい」「シュートの打ち方は野球やソフトボールのよう」「サッカーのゴールプレーに似ている」とあるように、組み立て局面から突破局面までは「バスケットボール」と、シュート局面は「サッカー」や「野球」と重ね合わせていると考えられる。つまり、オフenseを観察する際には、オフenseを突破までの局面とシュート局面の大きく2つの局面で捉え、それぞれの局面で起きている現象を他球技との比較を行いながら観察していると推察される。

一方、ディフェンス面では、主に「バスケ

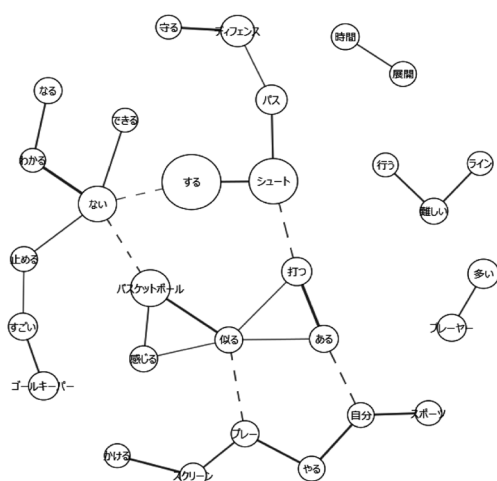


図1 1回目のゲーム視聴における共起ネットワーク図

トボール」との比較から、相手オフenseに対して「1人ひとりにつく」ディフェンス、すなわち人中心に守る「マンツーマン」ディフェンス(シュテラーほか, 1993, p. 397)、または「ゴールエリアライン」前の空間を囲むようなディフェンス、すなわち空間を中心にする「ゾーン」ディフェンス(シュテラーほか, 1993, p. 400)の2つの観点で観察していると解釈できる。つまり、ディフェンスを観察する際には、一人ひとりのディフェンス行動である個人戦術ではなく、チームで何を守るのかといったチーム戦術に着目していると考えられる。

#### ②シューターとゴールキーパーとの駆け引きの観点

引用文からシューターに対しては、シュートスピードの速さ、ジャンプ力の高さ、シュートバリエーションの豊富さを、ゴールキーパーに対しては、精神力の高さ、ゴールキーピングの難しさを感じていると解釈できる。また、引用文に「シュートを打つ最後の最後まで駆け引きが行われていて、すごく面白い」「ゴールキーパーを見ながら判断」「シュートするときは空中でのフェイント」とあるように、ハンドボールの最大の魅力であるシューターとゴールキーパーとの駆け引き(酒巻, 2007)に魅力を感じ、観察していると考えられる。

#### (2) 2回目のゲーム視聴における観点の特徴

2回目のゲーム視聴では、「作る」「フリー」「回す」などの7語がキーワードとして抽出された(表4)。これらの語が用いられている引用文には、「パスを素早く回してフリーを作るのがとてもレベルが高いなと感じた」「ゴールキーパーを下げて7人でプレーするのは大きな賭けだと思った」などがあった。

#### ①シュートに至るまでのプレーの意図を探る観点

引用文から「フリーの選手」や「スペース」を作り出すために、どのようなパスやオフザボールの動きが有効なのかについて着目してい

ると解釈できる。ハンドボール A ではパスやキャッチ、ドリブルなどの基本技術のほかに、様々なオフェンスポジションでのシュートを主に指導した。しかし、シュートを中心としたトレーニングだけでは、ゲームにおいて得点に結びつけることは難しい。学生はこのことを認識していると考えられ、すでにトレーニング経験

が豊富なシュートよりもシュートに行くまでの動きに関心を持ったと考えられる。また、オフザボールの動きや正確なパスが要求される広い空間での 2 対 1 や 2 対 2 を解決させるオフェンス中心の指導を行ったため、「ボールを持っていない周りのプレーヤー」の動きや、「パスを素早く回す」こと、ディフェンスを突破する技

表 3 1 回目のゲーム視聴におけるキーワードと引用文

回数	キーワード	引用文
1 回目	似る	スクリーンプレーをしているところは、バスケットボールと似ている。 バスケットボールに似ているところがあると感じたが、攻め方や、どこでシュートを打つべきなのかなど、よく分からないところもあった。 シュートを決めた後がサッカーのゴールプレーに似ている。 速攻を仕掛けたり速攻で攻めたり、バスケットボールに似ているところがたくさんあって、自分としてはやりやすそう。 バスケットボールやサッカーに似ていて、シュートの打ち方は野球やソフトボールのように打ったりと、色々なスポーツを組み合わせたようでとても楽しそう。 パスを回してディフェンスを崩す感じはバスケットボールに似ていると感じた。 バスケットボールよりも人数が多いので、それぞれの役割がより重要そうだと感じた。 バスケットボールと同じようにインサイドのプレーヤーがいる。 バスケットボールと違い、一人でボールを持ってもよい時間が決まっているので、展開が早い。 バスケットボールは手や体でシュートを止めるということをしませんが、ハンドボールでは出来るので、精神的にも強くなければと感じた。
	バスケットボール	バスケットボールと同じように、面をとったり、スクリーンをかけていた。 オーバーステップの数がバスケットボールとは違っていたり、初めの歩数の数え方が違うので、これからの授業で気をつけようと思った。
	感じる	バスケットボールよりも相手との接触が多いように見えた。 バスケットボールみたいに攻撃時間が決まっていないため、ゆっくり攻めることができる。
	打つ	シュートまでの動きはバスケットボールみたいだった。 バスケットボールのゾーンディフェンスみたいに 1 人が 1 人を守るのではなく、場所を守っている。オフェンスの時、ゆっくりと時間をかけている。
	ある	サッカーやバスケットボールと違い、日本側のディフェンスは一人ひとりにつくのではなく、ゴールエリアラインを囲み、直接ゴールを守るようにディフェンスしていた。
	ない	ジャンプしてシュートするときは空中でフェイントをかけるのがいいと感じた。
	できる	ゴールキーパーについては、コートが狭めでオフェンスとディフェンスの交代が激しいし、すごい勢いでシュートを狙われるので、精神的に最も大変なポジションだと感じた。
	なる	シュートを打つ最後の最後まで駆け引きが行われていて、すごく面白かったし、真似をしたくなった。 特に打ったボールがコートについてから変化し曲がっていくのは興味があった。
	わかる	シュートを打つ時、少しでもゴールに近づけるようにジャンプして落ちるギリギリまで打たない。 マンツーマンとゾーンディフェンスがある。
	止める	ボールがどこにあるのかわからなくなる。 ファウルにしないで、止めるのは難しそう。
	すごい	プレーヤーのゴールを狙う際のボールのスピードが半端ない。 自分が実際にやろうと思っできるプレーじゃないと思う。なぜなら僕は球技をあまりやっていないし、チームプレーをするスポーツではなく、思いっきり個人種目のスポーツだから、うまくできるかわからないが全力を出す。
	ゴールキーパー	試合を止めずに交代をしているのでマークマンがわからなくなる。 どちらのチームも 7 メートルラインに 1 人ポジショニングしているので、役割が気になる。 どのスポーツでも顔への攻撃は反則になる。 反則がどこでどのように行われているのかわからなかった。 あの小さなボールを止めるゴールキーパーの人がすごいと思った。 シュートを全身で止めるゴールキーパーがすごいタフに思える。 プレーヤーのジャンプ力がすごい。 すごい展開が速い。 空中でバウンドさせるか、どこを狙うかなどゴールキーパーを見ながら判断していた。 ゴールキーパーがいたり、角度がないシュートでもうまく回転をボールにかけて決めていた。 シュートコースが多すぎてゴールキーパーは難しいだろうと思う。 ゴールキーパーとプレーヤーのフェイントの掛け合いが多い。 ゴールキーパーは 1 対 1 の時には、割と前の方に出てきていた。

術であるカットインなどのプレーが有効であることを理解していると考えられ、「どのようにすればオフェンスにとって有利なフリーのスペースを作り出せるのか」といった観点でゲームを観察するようになったと考えられる。

## ②オフェンスにおけるチーム戦術の観点

引用文から、「ゴールキーパーを下げて7人でプレー」する7人攻撃、すなわちオフェンスにおけるチーム戦術の観点を持ちながらゲームを観察していると推察される。7人攻撃は、今回視聴対象としたゲームにおいて、7人攻撃中にはそのことを視聴者に示すために画面上に「Empty Goal」の表示があったこと、7人攻撃を失敗した場合には、無人のゴールへのシュートシーンが流れるため、7人攻撃を行っている

ことを理解しやすかったことの2つの理由から、受講者にとって認知的に理解しやすいチーム戦術であったと考えられる。また、引用文には7人攻撃以外のチーム戦術に関する記述が見当たらなかったため、受講者はオフェンスにおけるすべてのチーム戦術に関する観点を持っていたとは言いがたく、あくまでも「オフェンスにおける認知的に理解しやすいチーム戦術の観点」を持ち始めたに過ぎないと推察される。

## (3) 3回目のゲーム視聴における観点の特徴

3回目のゲーム視聴では、「する」「パス」「止める」などの16語がキーワードとして抽出された(表5)。これらの語が用いられている引用文には、「速攻の時、全員の戻りが速く、すでにセットディフェンスの形が少しできてい

表4 2回目のゲーム視聴におけるキーワードと引用文

回数	キーワード	引用文
2回目		ディフェンスをターンしてかわしてシュートを打つスペースを作るのは使えると思う。 今日の映像で、全身を使ってディフェンスをしているシーンやパスを回して相手が追いつかなくなったフリーの状態を作るシーンがあったので、レベルはまったく違うけれど、授業でそのようなプレーができれば良いと思った。 パスを素早く回してフリーを作るのがとてもレベルが高いなと感じた。 狭いコートに人がたくさんいるので、スペースを作ることがとても難しく感じた。 手渡しのパスなどでディフェンスが固まるので、オフェンスは攻めづらくなるので、そこでスペースを作るのも、フリーを作るのもとても難しくそう。 ボールを持っていない周りのプレーヤーが動いてスペースを作ったり、シュートに行った選手がディフェンスに止められ動けない時のカバーなどチームプレーができるともっとみんなとハンドボールを楽しめようと思う。 ゴールキーパーの横側にいる人もパスをもらい、シュートを打ったり、さらに回して、完全にフリーになっていた場面もあった。 パスの回すスピードやボール自体のスピードがとても速いなと感じた。 パスを素早く回してフリーを作るのがとてもレベルが高いなと感じた。
	作る	上でパスを回しながらタイミングよくカッティングしたりして、オフェンスを組み立てていた。
	フリー	ディフェンスの空きが出るまでは、ボールを回しながら、相手を観察し、空きができれば、瞬時にゴール前にパスを出し、シュートを打っている。
	回す	コーナーに必ず人がいて、ボール回しはトップの人たちでやって最後の1人はコーナーにいる人が打つことが多い。 パスをたくさん回してディフェンスを動かして、フリーになる状態を作って、シュートにつなげているシーンがあった。素晴らしいチームプレーだった。
	プレー	バスケットボールと違いオフェンスのタイムの制限がないからパス回しをしながらどう攻めるかを考えることができる。 デンマークの方が高さを生かしたプレーをしていて、フランスの方は、スピードを生かして一人ひとりがよく動いている印象を受ける。
	スペース	ゴールキーパーを下げて7人でプレーするのは大きな賭けだと思った。 デンマークはよくゴールキーパーを下げて7人でプレーしていると思った。 ゴールキーパーを下げて、1人プレーヤーを入れていた。オフェンスでミスをするミスと失点につながる。 ディフェンスのプレッシャーもすごくて、危ないプレーがたくさんあった。 攻守の切り替えが早くて、ゴールキーパーがいないうちに速くからシュートするというプレーが以外と多いんだと思った。
	難しい	私たちのような初心者とは違い、球速が速いので、止めるのは非常に難しいと思う。 ゴールキーパーはなかなか難しいが、手だけで止めがちになってしまうので、ディフェンス同様、全身を使うように心がけたい。
	感じる	前半を見た感じ、実力が拮抗しているせいか、点差がなかなか離れず、取って取られての感じだと思った。 たくさんシュートを打っていくというよりも、相手のディフェンスを崩すために左右にパスをしながら切り込んでいく感じで、自分たちの試合とは全くがっていた。 ゴールキーパーの身体能力が高い。7メートルスローは止められなくて当然ではないかと感じた。



表5 3回目のゲーム視聴におけるキーワードと引用文

回数	キーワード	引用文
3回目		<p>ロングシュートを打つフェイクから、中にいる人にパスをするのは、動きを大きくすることを意識すればできそう。</p> <p>紺チームが必死にチームディフェンスで守っていたが、白チームの1人の個人技でやられており、時にはチームオフェンスではなく個人で打開する力が必要だと感じた。</p> <p>ボールマンについているディフェンスの周りのディフェンスがカバーの意識を強く持っており、1人が抜かれてもすぐに誰かがマークすることができていた。</p> <p>どちらもボールマンに対するプレッシャーが良かった。</p> <p>少しでもシュートするスペースがあったら、迷わずにシュートしていた。</p> <p>ゴールエリア付近でディフェンスする人は、他の選手よりも早く戻っていた。</p> <p>マークする人を決めたらその人が思い通りに動かないようにマークしていた。</p> <p>ストレイトに速いシュートだけでなく浮かせるようなシュートをする。</p> <p>ボールを持った最初は2人でディフェンスをするようにしてすぐに攻めさせないようにしている。</p> <p>シュートを決める人と守る人、パスをする人に分かれている。</p> <p>自チームの走り出しとパスが早い。紺チームの決められた後のリスタートが早い。</p> <p>正面回りでパスを回して0度のところが空いたらパス。</p> <p>パスフェイクをして、相手を寄せて、逆をついてシュート。</p> <p>早めにボールマンにプレッシャーをかけて、パスコース限定、速攻を遅らせている。</p>
	する	<p>パスをうまく使い、スピードを落とすことなくシュートまで持ち込めていた。</p>
	パス	<p>グルグル回りながらクロスのタイミングでパスをし続けてからのシュート。</p> <p>3人で回っていて、1人が普通にパスをして、1人がシュートと見せかけてのパスをしてから、3人目がシュート。</p>
	止める	<p>戻りながら、3人ぐらいで囲んで、パスミス誘っていた。</p> <p>パスミスで速攻された時に相手の手元あたりに当たりに行って止めた。</p>
	速攻	<p>センターよりで、何人かで回した後に、左サイドの空いている人にパスを出して、シュート。</p> <p>2人でゴールキーパーからのパスを受けた人が相手を抜いて、パスし、そのままシュート。</p>
	ディフェンス	<p>パスランし、パスを出した人が走ってパスをもらいシュートができていた。</p> <p>素早く相手ゴールに向かい、パスを出してシュートしていた。</p> <p>ゴール前でパス回しで相手を崩せていた。</p>
	シュート	<p>体勢を崩しながらでもパスをつないで、スペースを作り出していた。</p> <p>あまりパスはなく、前に突っ込んでいって、シュートまでのスピードがあった。</p>
	出す	<p>自分がシュートを狙い、相手もギリギリまで引きつけて味方にパスを出し、ノーマークを作るのがうまい。</p> <p>2対1になった時に、ボールを持っているプレーヤーにパスを出させないように詰めている。</p>
	回す	<p>ボールを持っている逆サイドは常にパスカートを狙っている。</p> <p>パスを回してサイドから切り込んでいる。</p>
	サイド	<p>クロスしたパスが多い。</p> <p>1人でドリブルを使って速攻し、シュート直前でパスを出しディフェンスをかわしていた。</p>
	空く	<p>紺チームのオフェンスで、パスでディフェンスを動かし、空いたところで素早くシュートを決めていた。</p> <p>白チームはセットオフェンスの時、パスを回すと見せかけて、何度かフェイクしながら速攻に切り替えてシュートを決めていた。</p>
	チーム	<p>速攻は、1人のオフェンスにディフェンスを何人か寄せて、もう1人のオフェンスが空いて、シュートを決めていた。白チームは2人で走ってディフェンスが片方に寄った時にパスしてシュート。</p>
	紺	<p>パスを回してディフェンスを崩している。</p>
	行く	<p>パスや動きによってディフェンスを引きつけてフリーを作ろうとしている。</p> <p>大きくパスを出されることを警戒しているように見える。</p>
	決める	<p>ボールを持っている人に2人ぐらいで、後はマンツーマンディフェンスで追いかけて、速攻を止めようとしていた。</p> <p>4～5人がセンター付近に固まって、白チームがシュートを打とうとした時に、止めるために抱え込んでいた。</p>
	オフェンス	<p>相手が速攻で来た時に、仲間の戻りが遅いから、ファウルをわざとして流れを止めていた。</p> <p>速攻されないようにボールを持っている人を止めていた。</p>
	ない	<p>目の前の相手プレーヤーを全員が止めていた。</p> <p>ボールを奪った瞬間に、オフェンスの2～3人が素早く相手コートへ走り、ドリブルとパスをうまく使い、スピードを落とすことなくシュートまで持ち込めていた。</p> <p>ゴールキーパーが止めた瞬間に攻めに切り替えるのが早かった。</p> <p>速攻では1人で突っ走って、ディフェンスの上からシュート。</p> <p>コートを広く使って速攻を仕掛けるから、ディフェンスも広がって相手が守りにくくなっていた。速攻からのミドルシュート。</p>
		<p>速攻の時、全員の戻りが速く、すでにセットディフェンスの形が少しできていた。</p> <p>オフェンスが1人または2人で走ってくるのを2～3人でついて速攻をできないようにし、残りのディフェンスが加わり、セットディフェンスにつなげていた。</p> <p>紺チームのディフェンスは前衛に2人、後衛に6人など分かれたディフェンスを行って、打たせるとしても、遠くから、速攻に行かれても、後衛が守るというように機能していた。</p> <p>白チームの速攻は、ディフェンスが前にいてもフェイントでうまく避け、高くジャンプして上からシュートしていた。</p> <p>紺チームの速攻は、ディフェンスが戻る前に、速攻に行って、シュートまでつなげていた。</p> <p>速攻では、ボールを取った人、走り出す人がそれぞれ瞬間的に判断して相手の準備が整う前に攻撃ができていた。</p> <p>オフェンス2人に対して、ディフェンスが1人しかいないシーンを、ボールマンをうまく捕まえて得点を防いでいた。</p> <p>紺チームは1-1-4ディフェンスをしていた。</p> <p>インサイドのディフェンスがよく、オフェンスの形を作らせていない。</p>

表5 3回目のゲーム視聴におけるキーワードと引用文（つづき）

	<p>1-1-4ディフェンスと言っているが、2-4ディフェンスにしか見えなかった。ディフェンスのポジションが決まっている。</p> <p>6-0ディフェンスだったチームが相手の得点源であるプレーヤーに対して、オフザボールの時も警戒を強めて、上がってディフェンスしている。</p> <p>ジャンプシュートのフェイクを使い、ディフェンスがボールマンに集中してきたところで、ノーマークの味方を作り、案にシュートを打っていた。</p> <p>紺チームが必死にチームディフェンスで守っていたが、白チームの1人の個人技でやられており、時にはチームオフェンスではなく個人で打開する力が必要だと感じた。</p> <p>戻りが遅い味方のマークマンを全体でうまくカバーしながらディフェンスができていた。</p> <p>ボールマンについているディフェンスの周りのディフェンスがカバーの意識を強く持っており、1人が抜かれてもすぐに誰かがマークすることができていた。</p> <p>1人に対して、2人でディフェンスし、シュートを防いだ。</p> <p>マンツーマンディフェンスをしていたが、突破されて、ゴールを決められていた。</p> <p>6-0ディフェンスをしている。</p> <p>自分にディフェンスを引き寄せて、ノーマークの仲間を作っていた。</p> <p>ウイングのディフェンスが弱い。</p> <p>むやみに突っ込むのではなく、1回引いてディフェンスを前に出させて、スペースを作り、そこを攻めていた。</p> <p>1人がディフェンスを抑えて、シュートコースを作っていた。</p> <p>相手ボールになったら、すぐにディフェンスの形を作っていた。</p> <p>ゴールエリア付近でディフェンスする人は、他の選手よりも早く戻っていた。</p> <p>4人がゴールエリアで2人が4人の前でディフェンスを行っていた。</p> <p>ボールを持った最初は2人でディフェンスをするようにしてすぐに攻めさせないようにしている。</p> <p>高さを使い、ディフェンスの頭の上でシュートを打っていた。</p> <p>オフェンスとディフェンスが交代したらすぐにまた始まるので、どちらのチームもすぐに切り替えてディフェンス体勢に入っていた。</p> <p>ループシュートの判断がディフェンスから見ると、意外的確だと思う。フェイントの使い分けも的確。</p> <p>すぐに戻って、セットディフェンスの形を作ろうとしている。</p> <p>ディフェンスよりも先に、味方の動きを確認しながら戻っている。</p> <p>ゴールキーパーを超えるループのあるシュート。</p> <p>案にループシュートができていた。</p> <p>ピヴォットの位置や、シュートポジションを取ろうとしているオフェンスに対して、バックステップで戻りながらお互いにケアをしている。</p> <p>ジャンプシュートのフェイクを使い、ディフェンスがボールマンに集中してきたところで、ノーマークの味方を作り、案にシュートを打っていた。</p> <p>2回シュートフェイントしてからシュート。</p> <p>速攻からのミドルシュート。</p> <p>少しでもシュートするスペースがあったら、迷わずにシュートしていた。</p> <p>ストレートに速いシュートだけでなく浮かせるようなシュートをする。</p> <p>7メートルラインより後ろからシュートを狙いにいっていて、とても速い展開にしている。</p> <p>シュートのフェイント繰り交ぜていた。</p> <p>誰が誰につくのか声を出して伝えきれていた。</p> <p>全員で回している。</p> <p>ボールマンと逆サイドのプレーヤーもしっかり走っている。</p> <p>紺チームはクロスしながら得点を狙っていた。</p> <p>紺チームの決められた後のリスタートが早い。</p> <p>白チームは高い位置から攻めていた。</p> <p>白チームは背の高いプレーヤーを使いつつ攻めている。</p> <p>自チームのボールマンへのプレッシャーが強い。</p> <p>ボールを持っていない人もボールを受けて攻めに行ける準備ができていた。</p> <p>ボールマンから付きに行き、ボールマンに近い人に次につくことを優先していた。</p> <p>下から下がってくるオフェンスが見ることができていない。</p> <p>むやみに突っ込むだけでなく、オフェンスの時間でもその中で、強弱をつけてオフェンスをしていた。</p> <p>コートを大きく使ってスペースを広く取りオフェンスをしようとしている。</p> <p>近くにオフェンスが入ってきたら、周りに指示して警戒している。</p> <p>マークする人を決めたらその人が思い通りに動かないようにマークしていた。</p> <p>絶対に1人で守っていない。ヘルプが来ている。</p>
--	--

注）紺チームとは法政大学第二高校、白チームとは水見高校のことである。

た」「6-0 ディフェンス<sup>(注1)</sup>をしている」などがあった。

①速攻と速攻に対するディフェンスの観点

引用文に「速攻…相手の準備が整う前に攻撃」「速攻されないようにボールを持っている人を止めていた」「全員の戻りが早く、すでにセッ

トディフェンスの形が少しできていた」とあるように、3回目の視聴から速攻と速攻に対するディフェンスの観点を明確に持ちながらゲームを観察していると考えられる。受講者がこのようにゲームを観察した理由は、ハンドボールBの3・4回目の授業において速攻局面での指導をしたこと、コーチング・ハンドボールAの3回目の授業において局面分類の指導をしたことにあると考えられる。

#### ②グループ戦術の観点

引用文にオフェンス面では、「クロス」プレー<sup>(注2)</sup>、自分がシュートを狙い、相手もギリギリまで引きつけて味方にパス」「ロングシュートを打つフェイクから、中にいる人(ピヴォットプレーヤー)にパス」、ディフェンス面では、「カバー」や「ヘルプ」とあるように、1人のプレーヤーの動きを見るだけでなく2人以上の動き、すなわちグループ戦術についての観点を持ちながらゲームを観察していると推察される。受講者がこのようにゲームを観察した理由は、コーチング・ハンドボールAの2回目の授業において個人戦術、グループ戦術、チーム戦術についての指導を行い、4回目の授業においてクロスプレーの指導をしたことにより、2～3人で行っているグループ戦術の意図が見えるようになったことにあると考えられる。

#### ③ディフェンスにおけるチーム戦術の観点

引用文に「6-0 ディフェンス」「4-2 ディフェンス」「1-1-4 ディフェンス」とあるように、ディフェンス隊形に関する観点をゲームを観察していると解釈できる。また、「インサイドのディフェンス<sup>(注3)</sup>がよく」「ウイングのディフェンス<sup>(注4)</sup>が弱い」とあるように、ディフェンスポジションごとの評価の観点も持ち始めたと考えられる。受講者がこのようにゲームを観察した理由は、ハンドボールBの9・10回目の授業において、様々なディフェンス隊形を紹介したことにより、その観点を身につけることができたためだと推察される。

#### (4)「ゲームを見る観点」の変容

図2に、「ゲームを見る観点」の変容と授業内容との関係を示した。「ゲームを見る観点」は、1回目の他球技との比較の観点とシュートの駆け引きの観点から、2回目のシュートに至るまでのプレーの意図を探る観点とオフェンスにおける理解しやすいチーム戦術の観点へ、そして3回目の速攻と速攻に対するディフェンスの観点とグループ戦術の観点、ディフェンスにおけるチーム戦術の観点へと変わっていった。受講者は、基本的に授業内で指導した内容(学生が実際にトレーニングした内容)の観点をゲームを観察するようになっていったと考えられる。しかし、3回目の視聴では、引用文に「ヘルプ」「カバー」とあったように、授業内でトレーニングをしたことのないディフェンスにおけるグループ戦術に関する観点も見られた。ディフェンスにおけるグループ戦術については、コーチング・ハンドボールAにおける理論的な指導の中で簡単な解説を行ったに過ぎない。このことから、実際に実技的なトレーニングを行っていない内容に関しても、これまでの運動経験と理論的な指導のみで、「ゲームを見る観点」を養成できる可能性があることが示唆された。

#### (5) 保健体育科教員養成課程への示唆

本研究の結果から、受講者は実際にトレーニングを行わずとも、理論的な説明のみで新たな「ゲームを見る観点」を身につける可能性があることが明らかとなった。そのため、保健体育科教員養成課程の実技系の授業において「ゲームを見る観点」の養成を充実させるためには、授業担当者はその日の授業内容の指導のみにとどまらず、その周辺内容に関する解説を加えること、すなわち「ゲームを見る観点を養成するための種まき」を行うことが重要だと考える。そうすることによって、受講者がその種目の理解を深められる可能性が生まれると示唆される。

## (6) 知見の有効性と限界

方法で述べた通り、本研究は事例的な研究であるため、推測統計学を用いた母集団への直接的な一般化(西條, 2009)ではなく、アナロジー(類推)に基づく限定的な一般化(西條, 2008)を目指している。そのため、本研究で明らかにした「ゲームを見る観点」の変容の構造(図2)は、①対象者の「ゲームを見る観点」を理解したいという目的を抱いていること、②対象が本研究の結果と直接的に似ていること、③対象の構造が本研究の結果と似ていることの3つの条件が揃った事象に対して有効性を発揮しうる。しかし、そうした条件を仮定できない事象に適用することは難しいと考えられる。

## IV. 結論

本研究の目的は、大学生が自身の専門種目ではない実技系の授業を受講することによって、その種目の「ゲームを見る観点」がどのように

変化していったのか、その変容を明らかにすることだった。その結果、以下の3点が明らかとなった。

1. 学生の「ゲームを見る観点」は、他球技との比較の観点とシュートの駆け引きの観点から、シュートに至るまでのプレーの意図を探る観点とオフェンスにおけるチーム戦術の観点へ、そして速攻と速攻に対するディフェンスの観点とグループ戦術の観点、ディフェンスにおけるチーム戦術の観点へと変わっていった。
2. 主に授業で取り扱った内容に関して、「ゲームを見る観点」を持つようになった。
3. 実技的なトレーニングを行ったことのない内容に関しても、これまでの運動経験と理論的な指導のみで、「ゲームを見る観点」を養成できる可能性が示唆された。

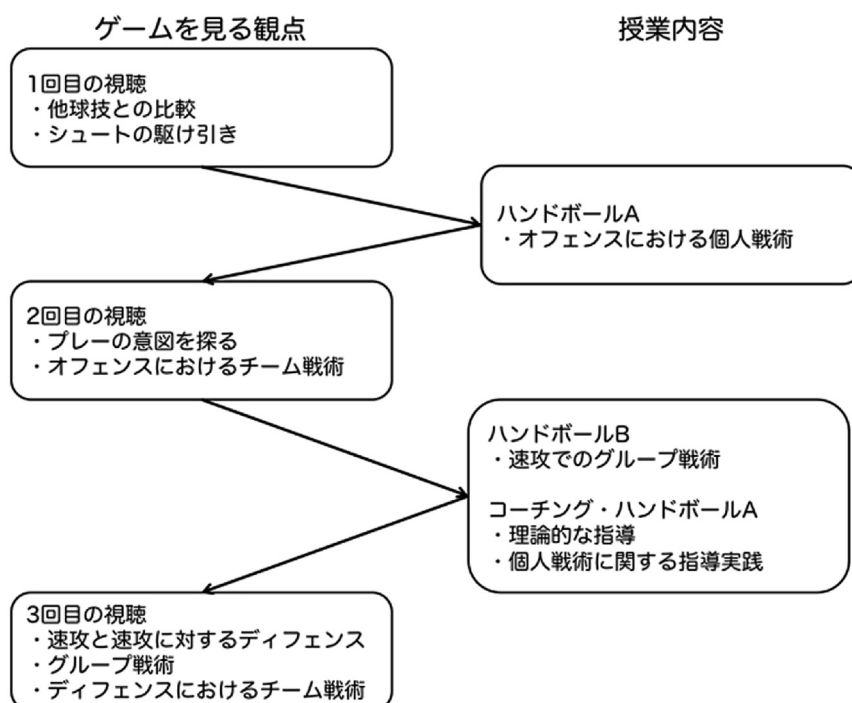


図2 「ゲームを見る観点」の変容

## 注記

- (1) ディフェンスプレイヤーが、ゴールエリアラインに沿って一列に並んで守るディフェンスシステムのこと。
- (2) 2人以上のオフenseプレイヤーが交差するようにパスを交換することで、ディフェンスのマークミスを誘うグループ戦術のこと。
- (3) コートの内側に位置しているディフェンダーのこと。
- (4) コートの外側に位置しているディフェンダーのこと。

## 文献

- 藤田育郎・細越淳二. 体育科模擬授業における学習成果の検討. 国土舘大学体育研究所報. 27 : 79-86. 2009.
- 藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ. 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討. 体育科教育学研究. 27 (1) : 19-30. 2011.
- 深見英一郎. 天理大学における教師教育プログラムの検討：体育の模擬授業実践及び授業観察の分析を通して. 天理大学学報（体育編）. 56 (3) : 23-34. 2005.
- フリック：小田博志ほか訳. 新版 質的研究入門：＜人間科学＞のための方法論. p. 542. 春秋社. 2011.
- 長谷川悦示. 筑波大学の体育授業実習例. 高橋健夫編著. 体育授業を観察評価する：授業改善のためのオーセンティック・アセスメント. pp. 145-151. 明和出版. 2003.
- 金子明友. 身体知の形成（上）. 2005.
- 木原成一郎・村井 潤・坂田行平・松田泰定. 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部学習開発関連領域. 56 : 85-91. 2007.
- 木原成一郎・日野克博・米村耕平・徳永隆治・松田恵示・岩田昌太郎. 教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究：テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部学習開発関連領域. 57 : 69-76. 2008.
- 岸本 肇. マイクロティーチングによる体育授業の体験学習の効果に関する研究. 神戸大学発達科学部研究紀要. 2 (2) : 195-202. 1995.
- 黒須雅弘・木村華織. 体育授業（陸上競技）作りの実践学習：「保健体育科教育法（陸上）」の授業報告. 東海学園大学教育研究紀要. 2 : 72-77. 2016.
- 永野翔大・ネメシュ ローランド・藤本 元・會田 宏. ハンドボール競技における強豪国と日本の一貫指導プログラムに関する比較研究. コーチング学研究. 30 (2) : 109-123. 2017.
- 文部科学省. 高等学校学習指導要領. pp. 69-75. 文部科学省. 2009.
- 文部科学省. 中学校学習指導要領. pp. 100-111. 文部科学省. 2017.
- 大隈 昇・保田明夫. テキスト型データのマイニング：定性調査におけるテキスト・マイニングをどう考えるか. 理論と方法. 19 (2) : 135-159. 2004.
- 大西武三. ハンドボールのゲームにおける局面の構成について. 筑波大学体育科学系紀要. 20 : 95-103. 1997.
- 西條剛央. ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM アドバンス編. pp. 102-110. 新曜社. 2008.
- 西條剛央. 質的研究で迷わないための超入門講座. p. 74. 医学書院. 2009.
- 坂入洋右. コーチング学における新たな応用的研究の可能性：包括的媒介変数を活用した実践的研究法. コーチング学研究. 24 (2) : 169-173. 2011.
- 酒巻清治. 確実に上達するハンドボール. p. 2.

- 実業之日本社. 2007.
- 佐野 淳. Lec. 13 運動の観察と分析. 金子明友・朝岡雅雄編. pp. 156-163. 運動学講義. 大修館書店. 1990.
- シュテラー・コンツァック・デブラー：佐藤 靖訳. 第8章ハンドボール. 唐木國彦監訳. ボールゲーム指導事典. 大修館書店. 1993.
- 土屋 純. 体操競技の技術トレーニングにおける運動分析の意義と方法. スポーツ科学研究. 4：18-27. 2007.
- 山竹伸二. 第2章質的研究における現象学の可能性. 小林隆児・西 研編. p. 77. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か：現象学と実践をつなぐ. 新曜社. 2015.